

プロローグ 東京への野心が、フルえる

「馬場副部長、引越しは順調ですか？」

運転中の永里が助手席の功一に何気なく声をかけた。功一は窓の外に目を向けたまま、素っ気なく答えた。

「全て妻に任せている」

部下との会話には興味がないという素振りでも、功一は流れ去る景色を終始眺めている。永里も功一の性格を知っているため、それ以上会話を続けようとはしなかった。

窓を開けていると、春の訪れを感じさせる風が功一の頬を撫でる。青年期から見慣れた鹿児島の風景と別れることに未練が全くないわけではないが、自分の腕を試せる絶好の機会を得て、功一の胸は高鳴っていた。

左腕に着けているシルバーのロレックスが視界に入る。それは、40歳で副部長に昇進した祝いに自ら購入したものだ。身につけるものがその人の品格を象徴する、と幼い頃から父親に教えられ続けたため、若い頃からロレックスや高級車は彼の憧れだった。

功一は元々北海道に住んでいたが、幼い頃に両親が離婚し、紛糾した離婚調停の末、父親のもとに引き取られた。証券会社に勤めていた父は鹿児島に転勤し、そこで再婚することになった。

プライドの高い父親は学歴にこだわり、功一をラ・サール高校に入れたが、当時の彼にはそこまでの学力がなく、進学したのは鹿児島市内にある中堅の県立高校だった。

新たに母となった人は鹿児島県で有名な酒造メーカーに勤めていた。彼女は一人っ子であり、実家は代々その会社を営んできた鹿児島でも有数の酒造会社だった。跡取りがいなかったため、父は証券マンを辞めて婿養子として母の会社に入った。そして功一は、「鈴木」から「馬場」へと姓を変えることとなる。

功一もその会社を継ぐように青年時代から強く勧められたが、酒造会社への入社には頑なに拒み続けた。少年期から写真が大好きだったので、カメラマンになりたかったのだ。ただ、不安定な職種であるため、それを生業にすることは諦めていた。代わりに志したのが建設の仕事だった。大学では建築を専攻し、建築業界への就職を希望した。両親とも自分たちの会社への就職を薦めたものの、彼は一切譲らなかった。父親との不仲が最も大きな理由であった。

息子の強い抵抗に根負けした両親は、地元建設会社への就職を斡旋してくれた。そして、母親の同級生が支社長を務める建設会社「大塚建設」の鹿児島支社が功一の就職先となった。支社長の植村は現在80歳だが、年齢を感じさせない大きな存在感を放っている。大手企業の地方支社では珍しくない「社長の化石」を象徴する人物とも評されていた。

功一がカメラを始めた頃に愛用していたのは、小学生の時に小遣いを貯めて買った一眼レフであった。その頃は北海道の雄大な風景を撮影することに夢中になり、頻繁にカメラ

を持って自転車で遠くまで撮影に出かけた。公募展に何度か応募し、奨励賞を受けるほどの腕前だった。

鹿児島に引越してからは、桜島や錦江湾、霧島神社など、北海道とは異なる自然の景色に魅了された。北海道を静と捉えるなら、鹿児島は動の土地である。桜島は頻繁に噴火し、火山灰で街が覆われる。西郷隆盛の西南戦争や鉄砲伝来など、歴史を揺るがす出来事の舞台でもある鹿児島は、功一の写真撮影への意欲をかき立てた。

一方、酒造メーカーの婿養子となった父親は功一に勉強を強いた。母の家系は代々有名高校・有名大学出身であり、功一に対する進学の期待が高かった。しかし結局、有名高校には進学ができず、青年期は自信を持ってぬままに日々を過ごした。

車が赤信号で止まったのをきっかけに、功一はふと我に返った。鹿児島を離れると決まっただけで、無性に思い出に浸ることが多くなった。

ハンドルを握る永里は、飄々とした表情でハミングをしている。入社15年目にしてようやく設計部の係長になった永里は、功一とは異なり、仕事ぶりもきわめて呑気である。そんな彼に好感を持ってぬまま、職場を共にしてきた。

永里に関しては、職務中にハミングをすることや、メールの文章に句点を省き、(笑)や顔文字を多用することなど、気に入らないことは多々あった。仕事をする時はプロ意識に徹するべきという信念を功一は持っており、永里の職務への緩さには常々眉をひそめていた。

かつてメールの返信で永里から「り」とだけ返されたことがあった。それが「了解」の略語だと分ならず、新規の建設プロジェクトが数日停滞した。そんな経験もあり、功一は部下の馴れ馴れしい表現や態度を容認できなかった。

「こんな田舎だから、仕事に対する姿勢が甘いんだ。東京本社なら、永里みたいな軽い奴はいないはずだ」と功一は期待していた。

25年にわたって勤めた鹿児島島の地を離れ、本社のある東京に異動できるようお願い出たのも、鹿児島で自分の才能を燻らせたくないという強い思いがあったからだ。支社長の植村には鼻根目に扱ってもらっていたが、代わり映えない会社の人間関係にうんざりしていた。

功一には、四月から中学二年生になる一人娘がいる。早いうちから東京の進学校に通わせ、実家に恥じない進路を選ばせたいという思いがある。自分が青年期に味わった屈辱を拭いきれず、自分の歩んだ道とは比べものにならないエリート街道を進ませて、実家の面子を保ちたいと考えていた。

胸中に潜む東京への野心的な期待に、我知らず功一は窓辺に置いた左拳を握りしめた。コツコツ……半開きの窓ガラスを、左手のロレックスが打ちつける音で、夢想は破れた。

(またこの症状か)

小さく震える左手を見て、功一は顔をしかめた。

数年前から、わけもなく左半身が震えたり、思うように体を動かしくなくなったりすること

が少しずつ増えてきた。40代後半になり、当初は体力の衰えかと思いき、栄養ドリンクやエナジードリンクを気休めに飲むようにしていたが、最近この症状が日に日にひどくなってきたと感じる。

「馬場副部長、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

永里の問いを受け流して、功一は震えるロレックスを右手で強く握りしめた。

幸いにも、車が止まる前に左手の震えは収まった。ネクタイをきつく締め直し、功一は永里と同時に車を降りた。小高い山の中腹に、百坪ほどある二階建ての建物が凜としたシルエツトで青空を切り取っている。周囲には民家やスーパーなど見当たらない。広々とオープンな空間を独り占めにしており、官能的な曲線で描かれた建物の輪郭は、アラビア数字の「8」に似た造形だ。外壁は杉の木材と大きなガラスで構成され、いかにも開放的だ。

建物に近づくくと、アルマーニのスーツにネイビーのスカーフを首に纏った白髪の男性が満面の笑みを浮かべて立っていた。功一は、車内での仏頂面から一変し、突如表情を変え口角を持ち上げた。

「塩田社長、お待たせしました」

「素晴らしいの一言だよ」

塩田は、洗練された建物の外観を前に、満面の笑みを浮かべていた。

「お褒めの言葉をありがとうございます。中へどうぞ」

永里は功一に促され、ポケットから玄関の鍵を取り出して扉を開けた。塩田を先頭に、功一、永里の順にゆつくりと中に入る。永里はバッグからスリッパを三つ取り出し、上がり框の上に置いた。

「どうぞ」

永里が勧めると、塩田はスリッパを履くのもどかしそうに、早速各部屋の検分を始めた。「土地の自然の形状をできる限り活かすために伐採は最小限にして、シンボルとする木を囲むように建物を設計しました」功一は自信满满で塩田に説明をする。

「私のイメージした通りの研修施設になっているな」

メインとなる部屋の隅々まで見まわした塩田は満足げに頷いた。

塩田はIT業界の黎明期にサーバー事業で成功を収め、その後、AI事業にも参入したやりの経営者である。社員教育に力を入れており、若手社員が寝泊まりしながらイノベーター的な事業開発を行うために、この施設の設計を大塚建設に依頼した。社内では手がけたがる人間が何人もいる中、功一が担当できたのは、地元で強く根を張る母方のコネクションのおかげだった。

「二階はあえて仕切りを設けず、広々としたスペースを確保しています。社員さんたちがさまざまなワークに取り組めるよう、設計を少し調整しました」

最近、企業の研修施設ではこのようなスペースが流行っている。ワークショップ形式で、席やテーブルを自由に移動させ、模造紙にポストイットを貼ったり、ペンでイラストを描いたりするらしい。

功一自身はそのような研修を今まで受けたことがなかった。基本的に一人で黙々と図面を書き、必要な時だけ同僚や現場監督と打ち合わせをするのが、彼の仕事スタイルだった。ワークショップなど単なる遊びでしかない——内心ではそう決めつけていた。

「うちは積極的に社員同士でワークショップをやらせているんだ。これからの時代は、若手社員がいかにリーダーシップを取れるかが経営の鍵なんだ」

「おっしゃる通りです」

功一は心にも無いことを言葉にした。心の奥では「そんな面倒なことしなくても、仕事ができる人間はいるんだ、俺のように」と呟いていた。

「ワークショップ用の椅子や机などの搬入は、馬場副部長の異動の後に私が引き継ぎます」永里はそう塩田に話した。

「え？ 馬場君、鹿児島を離れるの？」

「ええ、かねてから東京へ異動願いを出しており、ちょうど席が空いたみたいで……」「そうか、今までさんさん世話になったな」

「こちらこそ、塩田社長には数えきれないご依頼をいただきました」

塩田は、功一の母親と同じ高校の後輩である。繋がりがあった先輩の息子ということで、功一が大塚建設に入社して以来、大変臍尻にしてくれていた。鹿児島支社における功一の評価が高いのは長年、優良案件を定期的に依頼してくれた塩田のおかげと言っても過言ではない。

「東京でも元気にやりたまえ」

「はい」功一は鞆に手を入れ、建物の引き渡しを証明する書類を取り出そうとした。しかし、鞆に入れた左手が小刻みに震え、書類をうまく掴めない。

「どうしましたか、副部長？」いぶかしげに永里が尋ねた。

「いや、なんでもない」

功一は拳に力を入れ、指先に力を込めた。なんとか書類を取り出し、塩田に手渡した。車に戻ると、功一はネクタイを緩め、ため息をついた。

「お疲れ様でした」永里が運転席から声をかけてきた。

「塩田社長の件は、次回以降もよろしくな。長年のお得意様なので、私がいなくなった後でも、特に丁寧な対応を心がけるように」

「あれ？ 聞いてないですか。家具の搬入が終わったら、僕もいなくなりますよ」

「何？ 君も異動なのか？」

「いえ、独立します」

永里の突然の告白に、功一は目を丸くした。

「あ、馬場副部長は、先週の懇親会に出てないですね。そこでみんなに打ち明けたんです」功一は、会社の懇親会には全く顔を出さなかった。職場の人間と関わるのは勤務時間だけで十分と考えていた。給与に関係しないところで、会社やクライアントの話することに価値を感じないからだ。面倒なことに関わりたくないし、社員同士の愚痴を聞いたり、プライベートな話題に触れたりすることは、無駄な行為だと考えていた。

「独立といったって、このままこの会社にいれば課長になり、ゆくゆくは部長になれるんだぞ」私のポストが空くわけだから、必然的に昇進が決まるはずなのに、この男はなんて愚かな選択をしたのだろうか。功一には永里の浅慮が理解できなかった。少なからず私に相談をしていれば、正しい判断ができたものを。そう思うと、目の前の部下がひたすら哀れだった。

「馬場副部長も東京では、いよいよ馬場部長ですよ。鹿児島のように良い仕事してください」東京に行けば塩田社長のコネは無くなるが、仕事の幅は確実に広がる。これまでの自分の活躍を思えば、東京本社社員にも引けを取らない自信はあった。東京本社の部長が昨年急逝したことでポストが空いたのは、功一にとってまさに柵からぼたもちだった。

娘の鈴涼もこれから高校進学を迎えるにあたって、鹿児島よりも東京の学校の方が選択肢が増える。そのことは妻の恵も鈴涼のためになる環境の変化と捉えてくれていた。

今回の転勤は、功一にとっては全ての条件が揃った絶好の機会だった。功一は、まもなく49歳になる。新たなステージに向けて飛躍したい。まだこの年齢なら収入を上げることができると

住んでいる社宅を離れ、ローンを組んで都内のマンションを購入し、悠々自適の生活を送りたい。このロレックスも50歳になった時には18金のタイプに買い換えるんだと、左手の時計をまじまじと見つめた。

「馬場副部長、サイドミラーが見えないですよ」

気づくと功一は前屈みになっていた。

「すまない」

功一は体勢を戻して、座席にもたれかかった。この一年は手足の震えにくわえて、気がつくと同屈みの姿勢を取っている、ということもたびたび起きていた。体の変調はそれだけではない。功一は左利きなので、文字も左手で書く。その文字がなぜかだんだん小さくなってきた。

歩行中、階段で躓くことも増えた。脳の異常を疑い、MRIやCTを撮ったが、異常は全く見つからなかった。

医者からは疲労やストレスから来る一時的な異常だろうと言われ、ビタミン剤を処方されたが、改善される兆しは全くなかった。症状は時間とともにひどくなる一方だった。功一は、永里に気づかれないよう、ポケットに忍ばせていたビタミン剤を飲み、気を紛らわせようと車窓の遠くを見つめた。すると、ラグビーボールが飛び出したような外観の建物が突如現れる。功一はその建物に目を奪われた。

「永里君、あそこに立ち寄ってくれるか？」

永里は、功一の指差す方に顔を向ける。

「輝北天球館ですね。いいですよ」

十字路でハンドルを左に切り、車はその建物の方へ向かった。駐車場で車を降り、二人は建物の側まで近づいた。

「いつ見ても素晴らしいですよね」

「そうだな」

鹿児島を代表する建築家、高崎正治氏の代表作『輝北天球館』。功一が、鹿児島に引っ越してきてから、家族旅行で初めてこの大隅半島にドライブに来た際に心を打ち抜かれた建物だ。当時は竣工されたばかりということもあり、人で溢れかえっていた。

建造物の概念を覆すようなダイナミックなたたずまいと宇宙への広がりやを彷彿とさせる壮大なフォルムに、青年期の功一は呆然と見とれたのを今でも鮮明に覚えている。田舎の地にこんな建築物を造ってしまう作家がいるのだ――。

この時、功一は、その建築家のように人に感動を与える写真家になりたいと強く願った。その後、風景に限らず、高崎のようなアーティストの作品を写真に収めることに学生時代は没頭した。写真熱が止まらず、勉強もおろそかになるほどで、そのことを危惧した両親からは、写真を止めるように諭された。

功一は、天球館の前で息を呑みながら、思春期から長らく過ごした鹿児島での思い出が走馬

灯のように頭を巡った。鞆に入れていたお気に入りの一瞬レフのカメラを取り出すと、レンズを建物の前に向けた。彼の心を大きく揺さぶった建物を、今一度収めようとシャッターを切ろうとしたが、左手が震えてしまいピントをうまく合わせる事ができない。なんとか収めた数枚の写真は、どれもひどくぼやけていた。